

ゴウカライズ 数学

2025

大学入試 解答速報

順天堂大学 医学部



ゴウカライズ
オンライン大学受験絶対合格プロジェクト



医学部受験なら
ゴウカライズメディカル

ゴウカライズメディカル HP 公式LINE 無料相談実施中

1

に適する解答をマークせよ.

- (1) 一般項が $a_n = 2^{n+3}3^{-n}$ で与えられる数列 $\{a_n\}$ について, $a_n < 1$ を満たす最小の n の値は ア である. また, $\sum_{n=1}^{\infty} a_n =$ イウ である.

一般項が $b_n = a_1 \times a_2 \times \cdots \times a_n$ で与えられる数列 $\{b_n\}$ について, $b_n < 1$ を満たす最小の n の値は エオ である. ただし, $\log_{10} 2 = 0.3010, \log_{10} 3 = 0.4771$ とする.

- (2) 四面体 OABC において, $\angle AOB = \angle BOC = \angle AOC = 60^\circ$, $OA = 9, OB = 3, OC = 6$ である. 点 P は辺 OA 上を, 点 Q は辺 BC 上をそれぞれ独立に動く. このとき, 線分 PQ を 2:1 に内分する点を R とする.

$$\overrightarrow{OP} = s\overrightarrow{OA} \quad (0 \leq s \leq 1), \quad \overrightarrow{OQ} = (1-t)\overrightarrow{OB} + t\overrightarrow{OC} \quad (0 \leq t \leq 1)$$

とし, 辺 OB を 2:1 に内分する点を D とすると,

$$\overrightarrow{DR} = s\vec{k} + t\vec{l}, \quad \vec{k} = \frac{\text{ア}}{\text{イ}}\overrightarrow{OA}, \quad \vec{l} = \frac{\text{ウ}}{\text{エ}}\overrightarrow{OC} - \frac{\text{カ}}{\text{オ}}\overrightarrow{OB}$$

と表され, 点 R はある平面上を動くことがわかる. この平面を H とすると,

$$|\vec{k}|^2 = \text{キ}, \quad |\vec{l}|^2 = \text{クケ}, \quad \vec{k} \cdot \vec{l} = \text{コ}$$

より, 平面 H 上で点 R が描く図形の面積は サ $\sqrt{\text{シス}}$ である.

- (3) 4 次方程式 $P(x) = x^4 - 54x^2 - 40x + 269 = 0$ を考える.

$x = y + b$ とおいたとき,

$$P(y + b) = y^4 - 4y^3 - 48y^2 + 64y + 256$$

となる定数 b の値は $b =$ アイ である. さらに $y = az$ とおいて,

$$P(az + b) = cz^4 - cz^3 + dz^2 + cz + c$$

となるように定数 a を選ぶと $a =$ ウ であり, このときの定数 c と d の値は $c =$ エオカ , $d =$ キクケコ である.

方程式 $P(az + b) = 0$ において, $t = z - \frac{1}{z}$ とおくと $t = \frac{\text{サ} \pm \sqrt{\text{シ}}}{\text{ス}}$ である.

方程式 $P(x) = 0$ の実数解のうちで最大のものは $x = \sqrt{\text{セ}} + \sqrt{\text{ソタ}} + \text{チ} \sqrt{\text{ツ}}$ である.



(4) 次の ア ~ エ に当てはまるものを, 下の (A)~(D) から選べ.

(a) 実数 x について, $0 < |x+2| - |x-1| < 3$ は $-1 < x < 1$ であるための ア .

(b) 実数 x が有理数 a, b を用いて a^b と表せることは, x が有理数であるための イ .

(c) 無限級数 $\sum_{n=1}^{\infty} a_n$ が収束することは, 数列 $\{a_n\}$ が $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = 0$ を満たすための ウ .

(d) m, n, l を整数とする. $m^2 + n^2 + l^2$ が奇数であることは, $m + n + l$ が奇数であるための エ .

(A) 必要十分条件である.

(B) 必要条件であるが, 十分条件ではない.

(C) 十分条件であるが, 必要条件ではない.

(D) 必要条件でも十分条件でもない.



公式LINE



ゴウカライズメディカル HP

医学部受験ならゴウカライズメディカル
公式 LINE ([こちら](#)) で無料相談受付中!
公式 X (@goukalize) では解答速報公開中!

2

に適する解答をマークせよ。ただし、同じ記号の がある場合は同一の値がはいる。

3次関数 $f(x) = ax^3 + bx^2 + cx + d$ ($a \neq 0$) について、以下の (a), (b), (c) それぞれの場合における定数 a, b, c, d の値を求めよ。

(a) 3次関数 $f(x)$ は以下の条件 (i), (ii) を満たす。

- (i) $y = f(x)$ のグラフは直線 $y = 6x$ と3個の共有点 $(-2, -12), (1, 6), (4, 24)$ を持つ。
- (ii) $f(x)$ の $x = -2$ における微分係数が -3 である。

このとき、条件 (i) より

$$f(x) - 6x = a(x + \text{ア})(x - \text{イ})(x - \text{ウ})$$

となる。ただし、 $\text{イ} < \text{ウ}$ である。さらに、条件 (ii) を考慮して

$$a = \frac{\text{エオ}}{\text{カ}}, \quad b = \frac{\text{キ}}{\text{ク}}, \quad c = \text{ケ}, \quad d = \text{コサ}$$

を得る。

(b) 3次関数 $f(x)$ は以下の条件 (i), (ii) を満たす。

- (i) $y = f(x)$ のグラフは直線 $y = 6x$ と点 $(1, 6)$ で接し、かつ共有点 $(4, 24)$ を持つ。
- (ii) $y = f(x)$ のグラフは直線 $y = 6x - 12$ と接する。

このとき、

$$a = \text{シ}, \quad b = \text{スセソ}, \quad c = \text{タチ}, \quad d = \text{ツテト} \text{ である。}$$

(c) 3次関数 $f(x)$ は以下の条件 (i), (ii) を満たす。

- (i) $y = f(x)$ のグラフは直線 $y = 6x$ と点 $(1, 6)$ で接し、他に共有点はない。
- (ii) $f(x)$ は $x = -3$ で極値をとる。

このとき、

$$a = \frac{\text{ナニ}}{\text{ヌ}}, \quad b = \frac{\text{ネ}}{\text{ノ}}, \quad c = \frac{\text{ハヒ}}{\text{フ}}, \quad d = \frac{\text{ヘ}}{\text{ホ}} \text{ である。}$$



3

0以上の整数 n に対して

$$I_n = \int_0^{\pi/4} \tan^{2n+1} x \, dx$$

とする。

(1) I_0 を求めよ。

$$I_0 = \frac{1}{2}(\log 2)^2$$

(2) $n \geq 1$ のとき

$$I_n = (-1)^n \left(I_0 + \sum_{m=1}^n \frac{(-1)^m}{2m} \right)$$

が成り立つことを数学的帰納法によって示せ。

(3)

$$\log 2 = - \sum_{m=1}^{\infty} \frac{(-1)^m}{m}$$

を示せ。ただし、 $0 \leq x \leq \frac{\pi}{4}$ において、 $0 \leq \tan x \leq \frac{4}{\pi}x$ が成り立つことを用いてよい。



公式LINE



ゴウカライズメディカル HP

医学部受験ならゴウカライズメディカル
公式 LINE ([こちら](#)) で無料相談受付中！
公式 X (@goukalize) では解答速報公開中！

(1) 一般項が $a_n = 2^{n+3}3^{-n}$ で与えられる数列 $\{a_n\}$ について、 $a_n < 1$ を満たす最小の n の値は **ア** である。また、 $\sum_{n=1}^{\infty} a_n =$ **イウ** である。

一般項が $b_n = a_1 \times a_2 \times \dots \times a_n$ で与えられる数列 $\{b_n\}$ について、 $b_n < 1$ を満たす最小の n の値は **エオ** である。ただし、 $\log_{10} 2 = 0.3010$, $\log_{10} 3 = 0.4771$ とする。

(1) $a_n < 1$ を満たす最小の n

$$a_n = 2^{n+3} \cdot 3^{-n}$$

$$= 8 \cdot \left(\frac{2}{3}\right)^n$$



∴ a_n に対数をとる

$$\log_{10} a_n = 3 \log_{10} 2 + n(\log_{10} 2 - \log_{10} 3)$$

$$\log_{10} 2 = 0.3010, \log_{10} 3 = 0.4771 \text{ である}$$

$$= 3 \cdot 0.3010 + n(0.3010 - 0.4771)$$

$$= 0.9030 - 0.1761n$$

$$a_n < 1 \dots \textcircled{1}$$

① に両辺対数をとる

$$0.9030 - 0.1761/n < 0$$

$$\Rightarrow n > 5.4 \dots \text{計算は正確にしよう! 注意!}$$

∴ 最小の n は 6 である

$$\sum_{n=1}^{\infty} a_n = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{3} \left(\frac{2}{3}\right)^{n-1}$$

初項 $\frac{1}{3}$, 公比 $\frac{2}{3}$ の無限等比数列

$$\left|\frac{2}{3}\right| < 1 \text{ である}$$

$$\sum_{n=1}^{\infty} a_n = \frac{\frac{1}{3}}{1 - \frac{2}{3}} = \frac{1}{6}$$

$$\frac{2}{3} < 1 \text{ である}$$



$$b_n = a_1 \times a_2 \times \dots \times a_n$$

$$= 2^3 \left(\frac{2}{3}\right)^1 \times 2^3 \left(\frac{2}{3}\right)^2 \times \dots \times 2^3 \left(\frac{2}{3}\right)^n$$

ここで b_n の対数をとる

$$\log_{10} b_n = 3n \log_{10} 2 + \log_{10} \left(\frac{2}{3}\right)^1 + \dots + \log_{10} \left(\frac{2}{3}\right)^n$$

$$= 3n \log_{10} 2 + (1+2+\dots+n) \log_{10} 2$$

$$- (1+2+\dots+n) \log_{10} 3$$

$$= 3n \log_{10} 2 + \frac{1}{2}n(n+1)(\log_{10} 2 - \log_{10} 3)$$

$$3n \log_{10} 2 + \left(\frac{1}{2}n^2 + \frac{1}{2}n\right)(\log_{10} 2 - \log_{10} 3)$$

$$= \frac{1}{2}(\log_{10} 2 - \log_{10} 3)n^2 + \left(\frac{7}{2}\log_{10} 2 - \frac{1}{2}\log_{10} 3\right)n$$

$$= -\frac{1}{2}n \left\{ (\log_{10} 3 - \log_{10} 2)n - 7\log_{10} 2 - \log_{10} 3 \right\}$$

$$= -\frac{1}{2}n \left\{ 0.1761n - 1.6299 \right\}$$

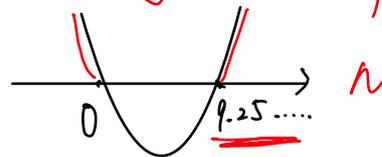
$$\text{ここで } b_n < 1 \text{ となる}$$

両辺の対数をとる

$$\Rightarrow \log_{10} b_n < 0$$

$$\Rightarrow 0 < \frac{1}{2}n \left\{ 0.1761n - 1.6299 \right\}$$

↓ n の二次式 = 0



よって $b_n < 1$ を満たす最小の n は 10



(2) 四面体 OABC において、 $\angle AOB = \angle BOC = \angle AOC = 60^\circ$ 、 $OA = 9$ 、 $OB = 3$ 、 $OC = 6$ である。点 P は辺 OA 上を、点 Q は辺 BC 上をそれぞれ独立に動く。このとき、線分 PQ を 2:1 に内分する点を R とする。

$$\vec{OP} = s\vec{OA} \quad (0 \leq s \leq 1), \quad \vec{OQ} = (1-t)\vec{OB} + t\vec{OC} \quad (0 \leq t \leq 1)$$

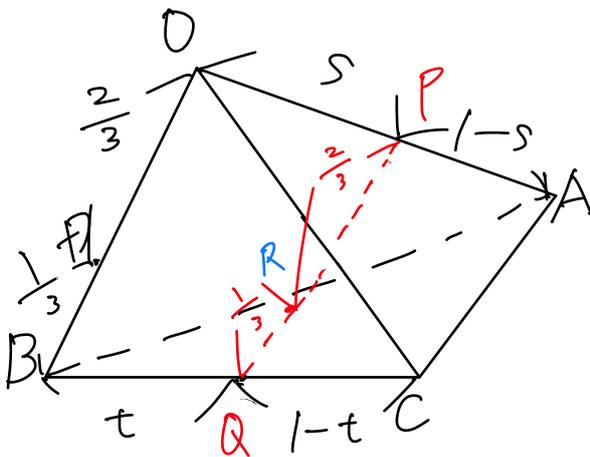
とし、辺 OB を 2:1 に内分する点を D とすると、

$$\vec{DR} = s\vec{k} + t\vec{l}, \quad \vec{k} = \frac{\text{ア}}{\text{イ}}\vec{OA}, \quad \vec{l} = \frac{\text{ウ}}{\text{エ}}\vec{OC} - \frac{\text{カ}}{\text{オ}}\vec{OB}$$

と表され、点 R はある平面上を動くことがわかる。この平面を H とすると、

$$|\vec{k}|^2 = \text{キ}, \quad |\vec{l}|^2 = \text{クケ}, \quad \vec{k} \cdot \vec{l} = \text{コ}$$

より、平面 H 上で点 R が描く図形の面積は $\text{サ} \sqrt{\text{シス}}$ である。



内題文は上図の如く表せる。

点 R は辺 PQ を 2:1 に内分した点であるため

$$\vec{OR} = \frac{1}{3}\vec{OP} + \frac{2}{3}\vec{OQ}$$

$$\therefore \vec{OP} = s\vec{OA}, \quad \vec{OQ} = (1-t)\vec{OB} + t\vec{OC}$$

$$\therefore \vec{OR} = \frac{1}{3}s\vec{OA} + \frac{2}{3}((1-t)\vec{OB} + t\vec{OC})$$

$$\text{また、}\vec{OD} = \frac{2}{3}\vec{OB} \text{ である (上図参照)}$$

$$\begin{aligned} \therefore \vec{OR} &= \vec{OR} - \vec{OD} \\ &= \frac{1}{3}s\vec{OA} + t\left(\frac{2}{3}\vec{OC} - \frac{2}{3}\vec{OB}\right) \\ \text{つまり } \vec{k} &= \frac{1}{3}\vec{OA}, \quad \vec{l} = \frac{2}{3}\vec{OC} - \frac{2}{3}\vec{OB} \end{aligned}$$

内題文に依ると。

$$|\vec{k}|^2 = \frac{1}{9}|\vec{OA}|^2 = 9$$

$$\begin{aligned} |\vec{l}|^2 &= \left(\frac{2}{3}\vec{OC} - \frac{2}{3}\vec{OB}\right)^2 \\ &= \frac{4}{9}(|\vec{OB}|^2 - 2\vec{OB} \cdot \vec{OC} + |\vec{OC}|^2) \\ &= \frac{4}{9}(9 - 2 \cdot |\vec{OB}| \cdot |\vec{OC}| \cos \angle BOC + 36) \\ &= \frac{4}{9}(9 - 2 \cdot 3 \cdot 6 \cdot \frac{1}{2} + 36) \\ &= \frac{4}{9}(9 - 18 + 36) \\ &= 12 \end{aligned}$$



$$\vec{k} \cdot \vec{l} = \frac{1}{3} \vec{OA} \left(\frac{2}{3} \vec{OC} - \frac{2}{3} \vec{OB} \right)$$

$$= \frac{2}{9} (\vec{OA} \cdot \vec{OC} - \vec{OA} \cdot \vec{OB})$$

∴

$$\vec{OA} \cdot \vec{OC} = |\vec{OA}| \cdot |\vec{OC}| \cdot \cos \angle AOC$$

$$= 9 \cdot 6 \cdot \frac{1}{2} = 27$$

$$\vec{OA} \cdot \vec{OB} = |\vec{OA}| \cdot |\vec{OB}| \cdot \cos \angle AOB$$

$$= 9 \cdot 3 \cdot \frac{1}{2} = \frac{27}{2}$$

∴ 2つの内積を別で計算して差し引く。

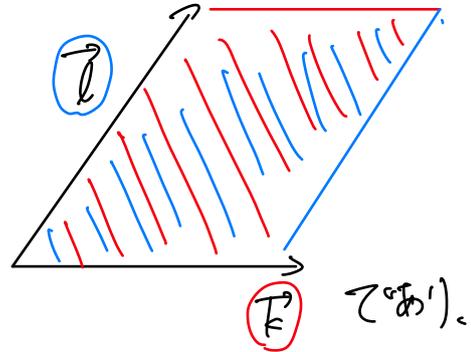
よって

$$\vec{k} \cdot \vec{l} = \frac{2}{9} \left(27 - \frac{27}{2} \right)$$

$$= \underline{\underline{3}}$$

$0 \leq s \leq 1, 0 \leq t \leq 1$ のとき $R \setminus \{r\}$

動く図形は



つまり \vec{k} と \vec{l} によって決まる
平行四辺形である。

$$|\vec{k} \times \vec{l}| = \sqrt{|\vec{k}|^2 |\vec{l}|^2 - (\vec{k} \cdot \vec{l})^2}$$

$$= \sqrt{9 \cdot 12 - 3^2}$$

$$= \underline{\underline{3\sqrt{11}}}$$

∴ これは $\frac{1}{2} \sqrt{|\vec{a}|^2 |\vec{b}|^2 - (\vec{a} \cdot \vec{b})^2}$ の応用。
(\vec{a} と \vec{b} の面積)



(3) 4次方程式 $P(x) = x^4 - 54x^2 - 40x + 269 = 0$ を考える.

$x = y + b$ とおいたとき,

$$P(y+b) = y^4 - 4y^3 - 48y^2 + 64y + 256$$

となる定数 b の値は $b = \boxed{\text{アイ}}$ である. さらに $y = az$ とおいて,

$$P(az+b) = cz^4 - cz^3 + dz^2 + cz + c$$

となるように定数 a を選ぶと $a = \boxed{\text{ウ}}$ であり, このときの定数 c と d の値は $c = \boxed{\text{エオカ}}, d = \boxed{\text{キクケコ}}$ である.

方程式 $P(az+b) = 0$ において, $t = z - \frac{1}{z}$ とおくと $t = \frac{\boxed{\text{サ}} \pm \sqrt{\boxed{\text{シ}}}}{\boxed{\text{ス}}}$ である.

方程式 $P(x) = 0$ の実数解のうちで最大のものは $x = \sqrt{\boxed{\text{セ}}} + \sqrt{\boxed{\text{ソタ}}} + \boxed{\text{チ}} \sqrt{\boxed{\text{ツ}}}$ である.

$$\begin{aligned} P(y+h) &= (y+h)^4 - 54(y+h)^2 \\ &\quad - 40(y+h) + 269 \\ &= y^4 - 4y^3 - 48y^2 + 64y + 256 \end{aligned}$$

①, ②の y の3次の係数を比較せよ.

$$\begin{aligned} 4C_1 \cdot b^1 \cdot y^3 &= -4y^3 \text{ である} \\ \Rightarrow b &= -1 \end{aligned}$$

同様に

$$\begin{aligned} P(az+b) &= (az-1)^4 - 54(az-1)^2 \\ &\quad - 40(az-1) + 269 \quad \text{--- ③} \\ &= cz^4 - cz^3 + dz^2 + cz + c \end{aligned}$$

③, ④の z の4次, 3次, 2次の項の係数をそれぞれ比較せよ

$$\begin{cases} a^4 = c \\ 4C_1 \cdot a^3 \cdot (-1)^1 = -c \\ 4C_2 \cdot a^2 \cdot (-1)^2 - 54a^2 = d \end{cases}$$

$$\Rightarrow \begin{cases} a^4 = c & \text{--- ⑤} \\ 4a^3 = c & \text{--- ⑥} \\ -48a^2 = d & \text{--- ⑦} \end{cases}$$

⑤, ⑥より c を消去

$$a^3(a-4) = 0 \quad \therefore a = 0, 4$$

⑤ $a = 0$ のとき

$y = 0$ のとき $x = -1$ であるが $P(-1) = 0$ を満たさず不適

④ $a = 4$ のとき

$$\text{①, ③より } c = 25b, d = -76b$$

$b = 1$ のとき ③, ④は一致するため

$$a = 4, c = 25b, d = -76b$$



$$P(az+b)=0$$

$$\Rightarrow z^4 - z^3 - 3z^2 + z + 1 = 0$$

$z - \frac{1}{z}$ の形を
つくるため $t = \dots$

$z=0$ はこの方程式を満たさない z と z^2 と
おくと

$$z^2 - z - 3 + \frac{1}{z} + \frac{1}{z^2} = 0$$

$$\Rightarrow \left(z - \frac{1}{z}\right)^2 - \left(z - \frac{1}{z}\right) - 1 = 0$$

$$t = z - \frac{1}{z} \text{ とし}$$

$$t^2 - t - 1 = 0$$

$$t = \frac{1 \pm \sqrt{5}}{2}$$

$$z - \frac{1}{z} = \frac{1 \pm \sqrt{5}}{2}$$

$$\Rightarrow 2z^2 - (1 \pm \sqrt{5})z - 2 = 0$$

z の二次方程式 $az^2 + bz + c = 0$ と $c \neq 0$ と
丁寧に計算しよう

$$z = \frac{(1 \pm \sqrt{5}) \pm \sqrt{22 \pm 2\sqrt{5}}}{4}, \frac{(1 \pm \sqrt{5}) - \sqrt{22 \pm 2\sqrt{5}}}{4}$$

よって

$$x = 4z - |z|$$

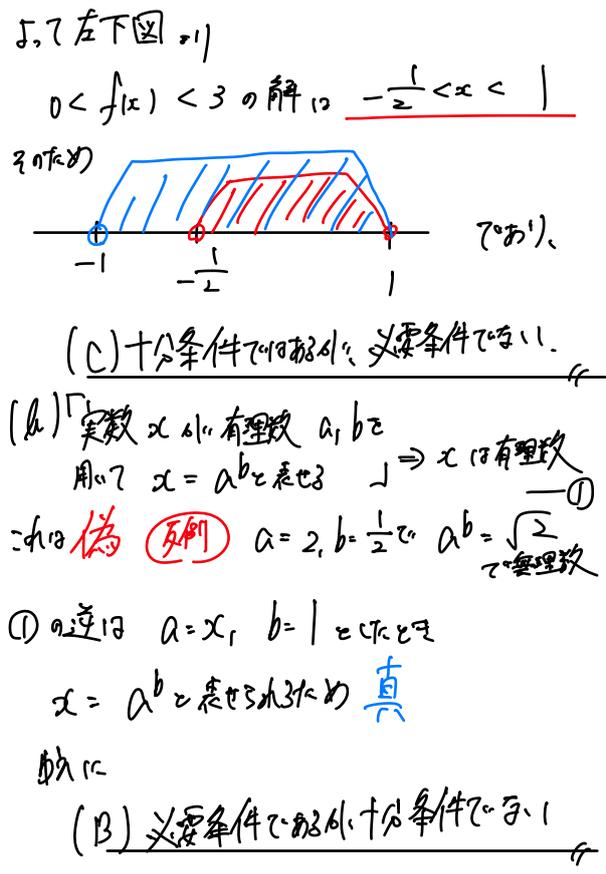
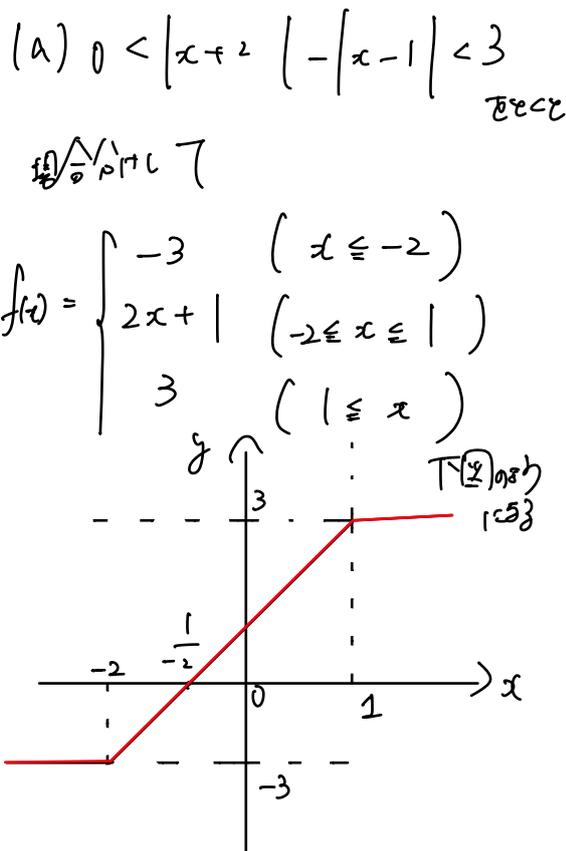
$$x = \pm\sqrt{5} + \sqrt{22 \pm 2\sqrt{5}}, \pm\sqrt{5} - \sqrt{22 \pm 2\sqrt{5}}$$

よって 複素数解の max は

$$x = \sqrt{5} + \sqrt{22 + 2\sqrt{5}}$$



- (4) 次の **ア** ~ **エ** に当てはまるものを、下の (A)~(D) から選べ。
- (a) 実数 x について、 $0 < |x+2| - |x-1| < 3$ は $-1 < x < 1$ であるための **ア**。
- (b) 実数 x が有理数 a, b を用いて a^b と表せることは、 x が有理数であるための **イ**。
- (c) 無限級数 $\sum_{n=1}^{\infty} a_n$ が収束することは、数列 $\{a_n\}$ が $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = 0$ を満たすための **ウ**。
- (d) m, n, l を整数とする。 $m^2 + n^2 + l^2$ が奇数であることは、 $m + n + l$ が奇数であるための **エ**。
- (A) 必要十分条件である。
 (B) 必要条件であるが、十分条件ではない。
 (C) 十分条件であるが、必要条件ではない。
 (D) 必要条件でも十分条件でもない。



(c) $\sum_{n=1}^{\infty} a_n$ が収束する $\Rightarrow \lim_{n \rightarrow \infty} a_n = 0$

1) (証明) $\sum_{n=1}^{\infty} a_n = \alpha$ とする。

$a_n = \sum_{k=1}^n a_k - \sum_{k=1}^{n-1} a_k \quad (n \geq 2)$ より

$\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = \lim_{n \rightarrow \infty} \left(\sum_{k=1}^n a_k - \sum_{k=1}^{n-1} a_k \right) = \alpha - \alpha = 0$
よって **真**

その逆は、

(反例) $a_n = \log\left(\frac{n+1}{n}\right)$ とする。

$\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = \lim_{n \rightarrow \infty} \log\left(1 + \frac{1}{n}\right) = 0$ であるが、

$\sum_{n=1}^{\infty} a_n = \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=1}^n \log\left(\frac{k+1}{k}\right)$

$= \lim_{n \rightarrow \infty} \sum_{k=1}^n \left(\log(k+1) - \log k \right) = \lim_{n \rightarrow \infty} \log(n+1) = \infty$

で偽

よって

(c) は十分条件であるが、必要条件ではない

(d) m, n, l が整数とする。

$\lceil m^2 + n^2 + l^2 \text{ が奇数} \rceil \Rightarrow l + n + m$ が奇数

(証明) $m^2 + n^2 + l^2$ が奇数なら、

① m, n, l がすべて奇数、

② m, n, l のうち2つは偶数で1つは奇数である。

この①②より、 $m+n+l$ は奇数のため **真**

その逆は、 $m+n+l$ が奇数のとき

$\Delta m, n, l$ がすべて奇数 $\Delta m, n, l$ のうち2つは偶数で1つは奇数

この場合、 $m^2 + n^2 + l^2$ は奇数であるため **真**

よって

(A) 必要十分条件。



3次関数 $f(x) = ax^3 + bx^2 + cx + d$ ($a \neq 0$) について、以下の (a), (b), (c) それぞれの場合における定数 a, b, c, d の値を求めよ。

(a) 3次関数 $f(x)$ は以下の条件 (i), (ii) を満たす。

- (i) $y = f(x)$ のグラフは直線 $y = 6x$ と3個の共有点 $(-2, -12)$, $(1, 6)$, $(4, 24)$ を持つ。
- (ii) $f(x)$ の $x = -2$ における微分係数が -3 である。

このとき、条件 (i) より

$$f(x) - 6x = a(x + \boxed{\text{ア}})(x - \boxed{\text{イ}})(x - \boxed{\text{ウ}})$$

となる。ただし、 $\boxed{\text{イ}} < \boxed{\text{ウ}}$ である。さらに、条件 (ii) を考慮して

$$a = \frac{\boxed{\text{エオ}}}{\boxed{\text{カ}}}, \quad b = \frac{\boxed{\text{キ}}}{\boxed{\text{ク}}}, \quad c = \boxed{\text{ケ}}, \quad d = \boxed{\text{コサ}}$$

を得る。

(1) 条件 (i) より

$$f(x) - 6x = a(x+2)(x-1)(x-4)$$

$$\therefore f(x) = a(x^3 - 3x^2 - 6x + 8) + 6x$$

$$f'(x) = a(3x^2 - 6x - 6) + 6$$

条件 (ii) より 条件に外れ、丁寧に計算して

$$f'(-2) = 18a + 6 = -3$$

$$\therefore a = -\frac{1}{2}$$

$$f(x) = -\frac{1}{2}x^3 + \frac{3}{2}x^2 + 9x - 4$$

(2) 条件 (i) より (1)と同様に

$$f(x) - 6x = a(x-1)^2(x-4)$$

$$f(x) = a(x^3 - 6x^2 + 9x - 4) + 6x$$

$$f'(x) = a(3x^2 - 12x + 9) + 6$$

$$f'(-2) = 6 \quad \text{丁寧に計算}$$

$$3(x-1)(x-3) = 0 \quad x=1, 3$$

$$\therefore (-2, -4a+18) \text{ を通る直線は}$$

$$y = 6(x-3) + (-4a+18)$$

$$= 6x - 4a$$

$$y = 6x - 12$$

$$6x - 4a = 6x - 12 \quad a = 3$$



$$5.7 \quad a = 3 \text{ であり } \lambda = 7$$

$$f(x) = 3(x-1)^2(x-4) + 6x$$

$$= 3x^3 - (8x^2 + 33x - 12)$$

(C)

条件 (i) より 同時に

$$f(x) - 6x = a(x-1)^3 \text{ であり}$$

$$f'(x) = 3a(x-1)^2 + 6$$

(ii) より $f'(-3) = 0$ より

$$f'(-3) = 3a \cdot 16 - 6 = 0 \text{ より}$$

$$a = -\frac{1}{8}$$

$$f(x) = -\frac{1}{8}(x-1)^3 + 6x$$

$$= -\frac{1}{8}x^3 + \frac{3}{8}x^2 + \frac{35}{8}x + \frac{1}{8}$$

丁寧に計算
してください!!



3

0以上の整数 n に対して

$$I_n = \int_0^{\pi/4} \tan^{2n+1} x \, dx$$

とする。

(1) I_0 を求めよ。

$$(1) I_n = \int_0^{\pi/4} \tan^{2n+1} x \, dx \quad (1)$$

$$I_0 = \int_0^{\pi/4} \tan x \, dx$$

早く色々やれ!
 $\int \frac{-1}{\cos x} dx = \int \frac{-1}{\cos x} dx$ とおき!

$$= \int_0^{\pi/4} \frac{-(\cos x)'}{\cos x} dx$$

$$= \left[-\log |\cos x| \right]_0^{\pi/4}$$

$$= -\log \frac{1}{\sqrt{2}} - (-\log 1)$$

$$= \frac{1}{2} \log 2$$

(2)

① $n=1$ のとき

$$I_1 = \int_0^{\pi/4} \tan^3 x \, dx$$

$$\tan^2 x + 1 = \frac{1}{\cos^2 x} \quad (2)$$

$$= \int_0^{\pi/4} \left(\frac{1}{\cos^2 x} - 1 \right) \tan x \, dx$$

$$= -I_0 + \int_0^{\pi/4} \tan x \cdot (\tan x)' dx$$

$$= -I_0 + \left[\frac{1}{2} \tan^2 x \right]_0^{\pi/4} =$$

$$= -I_0 + \frac{1}{2} \cdot \left(\tan \frac{\pi}{4} \right)^2$$

$$= -I_0 + \frac{1}{2} \quad \text{と } (1) \text{ 成立}$$



① $n=k$ で成立してゐる。

$$I_k = (-1)^k \left(I_0 + \sum_{m=1}^k \frac{(-1)^m}{2m} \right) \quad \text{である。}$$

このとき、

$$I_{k+1} = \int_0^{\frac{\pi}{4}} \tan^2 x \tan^{2k+1} x dx$$

\downarrow
 $\tan^2 x + 1 = \frac{1}{\cos^2 x}$

①の積かゝり
同様!!

$$= \int_0^{\frac{\pi}{4}} \left(\frac{1}{\cos^2 x} - 1 \right) \tan^{2k+1} x dx$$

I_k

$$= -I_k + \int_0^{\frac{\pi}{4}} \tan^{2k+1} x (\tan x)' dx$$

$$= -I_k \left[\frac{1}{2k+2} \tan^{2k+2} x \right]_0^{\frac{\pi}{4}}$$

$$= -I_k + \frac{1}{2k+2} - 0$$

$$= -I_k + \frac{1}{2(k+1)}$$

$$= -(-1)^k \left(I_0 + \sum_{n=1}^k \frac{(-1)^n}{2n} \right) + \frac{1}{2(k+1)}$$

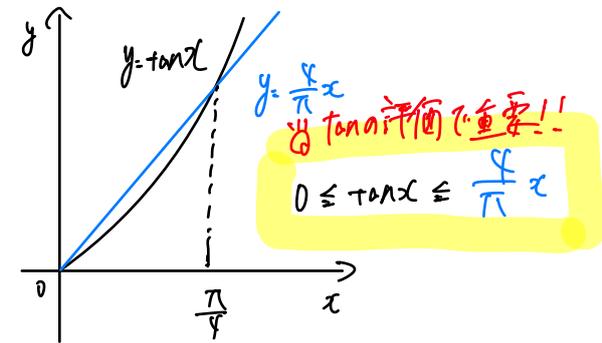
① $m=k+1$ の $\frac{(-1)^m}{2m}$ が加わる

$$= (-1)^{k+1} \left(I_0 + \sum_{m=1}^{k+1} \frac{(-1)^m}{2m} \right)$$

である) $n=k+1$ で成立

② ①を数学的帰納法で示す。

(3) $0 \leq x \leq \frac{\pi}{4}$ において



$$I_n \leq \int_0^{\frac{\pi}{4}} \left(\frac{x}{\pi} x \right)^{2n+1} dx \quad \text{である。}$$

これを左辺に等しい

$$\int_0^{\frac{\pi}{4}} \left(\frac{x}{\pi} x \right)^{2n+1} dx$$

$$= \left[\frac{1}{2n+2} \cdot \frac{\pi}{4} \cdot \left(\frac{x}{\pi} x \right)^{2n+2} \right]_0^{\frac{\pi}{4}}$$

$$= \frac{1}{2n+2} \cdot \frac{\pi}{4} \xrightarrow{n \rightarrow \infty} 0 \quad \text{である}$$

(3)の(2)の原理より

$$\lim_{n \rightarrow \infty} I_n = 0$$



(2) 証明

$$|I_n| = \left| I_0 + \sum_{k=1}^n \frac{(-1)^k}{2^k} \right| \quad \text{で証明}$$

$n \rightarrow \infty$ に近づくと

$$0 = \left| I_0 + \sum_{k=1}^{\infty} \frac{(-1)^k}{2^k} \right|$$

$$\Rightarrow -\sum_{k=1}^{\infty} \frac{(-1)^k}{2^k} = -2I_0 = \log 2$$

よって証明完了。

